

朝士視察団（一八八二）の日本経験に見られる近代の特性

許 東 賢

郷 田 正 萬
吉 井 蒼 生 夫
(共訳)

目 次

はじめに

I. 近代日本の表象としての日本型国民国家

1 国家統合装置の創設

2 資本主義に向かう経済統合

3 国民創出のための文化統合

II. 朝士視察団の国家構想

1 近代日本を見る二つの観点

2 朝鮮改革の双頭馬車

III. 岩倉使節団との比較を通じて見た朝士視察団の限界
結びにかえて

はじめに

朝士視察団（俗称、紳士遊覧団）は、明治日本の近代文物と制度を視察し、その見聞したことを朝鮮に反映しようとした点で、韓国の近代化運動史上、画期的な意味を持つ事件である。中堅高位官僚一二名と留学生五名を含む随員二七名、日本人通訳二名を含む一二名の通訳官、および下僕一三名で構成された六四名の朝士視察団は、一八八一年、約四ヶ月間、明治日本の文物と制度を詳細に調査した。これは韓国史上、西欧近代の受容を本格的に図り、さらには、朝鮮近代化のモデルを日本から求めた最初の試みであった。

当時朝士たちは、日本政府の様々な機関と税関の運営、および陸軍の訓練などに関して、各自が専門的に研究・調査し、その結果を報告する任務を持っていた。彼らは、任務遂行の過程において、日本が西欧の近代を真似て、政治・経済・軍事・産業・社会・文化・教育部門で成し遂げた刮目すべき成果を八〇余冊の報告書にまとめた。

このように、明治時代の日本の近代化像を体系的に把握し評価したという点で、朝士視察団は、日本の近代国民国家形成に重要なきっかけとして作用した一八七一年の岩倉使節団に比肩される歴史的意義を持つものである。

岩倉使節団に同行した歴史家である久米邦武（一八二九～一九三一）は、一八七六年に五巻の『米欧回覧実記』を刊行したが、このことによつてこの使節団が収めた成果は、日本政府と国民が西欧近代を幅広く受容する契機になった。他方、朝士視察団が残した報告書は、一般の人々にまで広範囲に知られることがなかったことから、その当時、直ぐには『米欧回覧実記』のような影響力を発揮したと見なすことは難しい。しかし、これらの報告書に含まれている近代日本に関する具体的な知識と情報は、当時朝鮮の開化と自強を熱望した開化派を中心とする知識層の間でかなりの反響を引き起こし、衛正斥邪論に立脚した否定的な日本観と西欧文物に対する見方を崩す起爆剤の役割を果たした。

したがって、これらの報告書は、一八八〇年代の開化・自強を推進しようとしていた朝鮮王朝政治家たちが、日本と西欧の近代に対して持っていた認識態度およびその深度を測る上で一級の資料であるといえることができる。

本研究は、朝士視察団が日本で直面した近代の特性は何であり、彼らの経験が朝鮮の近代化過程でどのように投影されたのかを考察することを目的とする。本稿ではまず、当時の明治日本で具現された近代の表象としての日本型国民国家が西欧のそれとどのように異なるのかを考察する。つぎに、朝士視察団が経験した日本近代の諸様相が、朝士視察団員の世界観と思考にどのような影響を及ぼしたのかを考察する。最後に、一世紀前の韓国人が主体的に近代国家を建設することに失敗した理由を、朝士視察団と岩倉使節団の近代経験に見られる相違点を考察することによって究明する。

I. 近代日本の表象としての日本型国民国家

一八八一年当時、朝士視察団が訪ねた日本は「文明開化」の旗を掲げて、フランス革命以来の西欧国家が創りだした近代化の諸制度を移入するのに熱中していた。例えば、陸軍はフランス、海軍は英国、教育は米国、皇室は英国、憲法はドイツの制度を導入して、日本に相応しく変更し定着させる作業が盛んに行われた。辞書的な意味における「文明開化」は「明治初年の近代化や欧化主義の風潮」を意味する⁽²⁾。しかし、文明開化として表象される日本の近代は、単純な西欧文物と制度の導入だけでなく、天皇制を復活させた明治維新の不可避な産物として、日本古代の復古でもあった。ここから、「西欧近代と日本の癒着」という日本近代の特殊性が出てくる。これらにより創られた「西欧の逆像」としての日本の近代は、西欧近代が「誤解・誤訳」されたか「捏造」されたもので、両者間には本質的な差異があった⁽³⁾。いずれにせよ、朝士視察団が日本を訪問した頃には、日本における近代の原型はほとんど完成されており、これは日本型の国民国家という表象として存在していた。

明治時代の日本人が具現しようとした近代は、国民国家の姿として可視化された。西欧近代の産物である国民国家は、フランス革命期のフランス人には、人間に対する解放の装置であり、明治時代の日本人には、追求して具現しなければならぬ目標であった。そして、開化期における朝鮮人には、成し遂げようとして失敗した目標で、かつ現代の韓国人にとっては、達成すべき未完の課題である⁽⁴⁾。最近の学説の概念定義を整理してみると、非西欧地域における国民国家は、つぎのような特徴を持っている⁽⁵⁾。

まず第一に、国民国家はその政治体制が君主制あるいは共和制、ならびに民主的あるいは専制的ないずれの体制であらうとも、国家を担当する主体は国民でなければならない、ということである。また、ある国家が国民国家である

か否かは自国民ではなく、国際的に他の国家によって判定されるのであり、西欧の価値基準に従う文明化―西欧化―の程度がその基準になる。

第二に、国民国家は国家統合のための議会・政府・軍隊・警察などの支配抑圧機構から、家族・学校・言論媒体・宗教などの理念的装置まで、様々の装置が必要であり、国民統合のための強力なイデオロギーが必ずなければならない。

第三に、国民国家は独り存在するものではなく、ほかの国民国家との関係のなかで存在する。したがって、国民国家は世界的な国民国家体系のなかでその位置が設定されるのであり、それぞれの独自性を標榜しながらも、互いに模倣しながら類似性を帯びる傾向がある。

「想像の共同体」としての国民国家は、民族すなわち国民を統合する前提として経済統合（交通網、土地制度、貨幣と度量衡の統一）、国家統合（憲法、議会、徴兵による国民軍）、国民統合（戸籍、博物館、政党、学校、新聞）、文化統合（国旗、国歌、誓約、文学、修史）などを成し遂げなければならない。言い換えれば、非西欧地域における国民国家というのは、その政体の民主性如何に関わりなく、いわゆる「想像の共同体」としての国民を単位とした国家であるだけである。

1 国家統合装置の創設

一八八一年朝士視察団が訪問した当時の日本の国家統合装置は、つぎのようなものであった。明治維新によって、日本は政治権力の中央集権化を図った。一八六八年の王政復古は、単に古代の天皇制への復古ではなかった。それは、天皇を国家統合の象徴として掲げ、事実上政治権力を掌握していた藩閥勢力が、自らの正統性を獲得するため

あった。⁽⁶⁾したがって、明治維新以後、執権的政府の統治制度は、中国の律令体制を基盤にした古代の天皇制度を復旧したものであるというよりは、西欧近代国民国家の国家統合のための統治と支配の装置を日本式に換えて（―捏造して―）導入する形で形成された。⁽⁷⁾このように、一八八一年朝士視察団が日本を訪問した時には、執権的政府が事実上すべての政治権力を独占していたが、⁽⁸⁾外形的には西欧の三権分立形態が整えられていた。そして在野においては、執権的政府の権力独占に反発し、立憲政体を樹立し民選による議会を開設することを要求する自由民権運動が活発に展開されていた。それだけでなく当時の日本は、司法権の独立と近代刑法の施行を準備していたのであり、徴兵制による国民軍も確保していた。

実際に朝士たちが訪問した、非民主的な執権的政府として特徴づけられる日本型国民国家の国家統合のための装置は、市民階級の成長が遅れたことによって、多元化された近代市民社会を創出するためには根本的な限界があった。以後、日本の歴史に示されるように、明治初期の非民主的な執権的政府は、その胎内に軍国主義日本の原型を持っていた。それにも拘わらず、西欧の制度を部分的に模倣した当時の日本の統治体制は、立憲体制に移行する過度的な体制であり、三権分立体制を備えていたために、外形的には近代政治体制の発展方向と一致していたと見ることができ。そして、このような日本の統治・支配機構は、日本のように市民階級が存在していなかった当時の朝鮮としては、朝鮮のモデルにすべき唯一の代案であった。

2 資本主義に向かう経済統合

朝士視察団が日本を訪問した時、すでに日本には商品の流通と人々の往来が活発であり、情報と知識を円滑に交流

できるようにする空間の文明化が進行していた。すなわち、明治政府は鉄道と交通網を建設し海運業を起こし、近代的交通機関を保護・育成する一方、郵便・電信制度を導入し通信制度を統一・近代化することによって、全国土の均衡的發展を達成しつつあった。特に、「文明開化」の象徴として整備された街路を備えた都市の夜道には、街路灯がついており、人力車と馬車が往来するなど、文明の利器がみられるようになった。近代の表象としての空間の文明化は、朝士たちを魅惑するのに充分であった。⁽⁹⁾

また、明治維新以後、日本は強力な中央政府の主導の下で、会社制度の導入と貨幣制度の統合など、経済制度の改革と租税制度の改定および秩禄処分による資本の原始的蓄積の基礎を作り、これらを土台に殖産興業政策を推進し、近代資本主義国家へ成長した。

明治政府の経済政策の第一の課題は、統一された国家体制の前提条件である中央集権的財政機構を確立するところにあった。そこで一八六九年大蔵省を設立し、財政だけでなく内政に対しても広範囲にわたって権限を行使できるようにし、翌一八七〇年には近代産業の移植を目的として工部省を設立し、鉄道と鉾山を中心として電信・土木・造船など、さまざまな分野から西欧の近代的機械技術と資本を導入し、政府主導の官営事業を拡大して行った。⁽¹⁰⁾ このように、当時日本は、国内的には近代資本主義国家へ発展するための経済統合の基礎を固める一方、対外的には琉球王国を併合し、台湾を侵略しながら、朝鮮に対しては開港を強要し市場を拡大して行く膨張主義政策を実施し、すでに植民地確保のための帝国主義侵略の途を備えていた。

3 国民創出のための文化統合

日本の「文明開化」政策は、一言でいうと、西欧の文明を移植して全国民を中央集権的に統治する体制を作り出し、西欧の基準に合わせて国民を「文明化」するものであった。明治政府はまず、均一な国民を形成するために身分制を廃止して四民平等を宣言し、属地主義に基づきすべての国民を同一の戸籍制度の下で把握した。

一八七二年には、学制を公布して均一な国民を養成する装置として学校設立を規定し、人身売買の禁止および職業と移住の自由を保障した。翌一八七三年には、旧暦を廃止して太陽暦を採択し、西洋列強と同一な時間体系を樹立した。また一八七五年には「新聞紙条例」を制定して政治批判を厳しく禁止することによって、新聞を政府政策の広報ないしイデオロギー伝播手段として活用した。さらに神道を国教と定め、宗教を通じた文化統合を試みる一方、西欧基準から見ると野蛮的な男女混浴を厳禁する等、風俗を西洋式に改造して行った⁽¹⁾。朝士たちは、このように西欧化、すなわち文明化を実現する道具として新たに整備された制度と装置をはじめ、これによる社会・風俗上の大変革を直接に目撃した。

II. 朝士視察団の国家構想

1 近代日本を見る二つの観点

人間が事物を見る認識の幅と深さは、自ら受けた教育の内容と自らが見聞したところの社会の大きさに比例する。

朝士視察団一行もその例外ではない。彼らは、自らが知っている知識に基づき、日本近代の国民国家の諸装置を理解し、自らが感じたことによつて、朝鮮を改革する際に応用しようとした。当時朝士たちは、大きく二つの互いに異なる目で、近代日本を診断していた。

魚允中(一八四八―一八九六)と洪英植(一八四五―一八八四)の二人の朝士は、開港以後の初期開化思想家と言える朴珪壽(一八〇七―一八七七)の影響を受けており、また金弘集(一八四二―一八九六)や朴泳孝(一八六一―一九三九)、金玉均(一八五一―一八九四)と交流しながら初期開化派の一員として成長した。そして彼らが朝士に任命された頃には、華夷論的世界観と小中華意識から脱して、日本の近代化を客観的に認識し理解するほど目覚めていた。しかしその他の朝士らは、依然として儒教的価値を尺度にして世界を見ていた。

この点は、朝士視察団が日本に出発する前に、釜山所在の日本領事館で起きた逸話を紹介した一八八一年五月二〇日付の『朝野新聞』の記事によく示されている。⁽¹²⁾

釜山にて近藤領事が此一行を訪はれたる際、参議沈相學手を以て目を掩ひしかば、領事は之を見て其故を問ひ、若し病ひの起りしならば醫師を迎ふべしと云はれしに、開化黨の魚允中傍より進み出で曰く、沈が病は日本の水を以て之を洗ひ、日本の風に吹かるゝときは忽ちにして癒べしと。此事を聞くや守舊黨の沈相學は大に怒り、其故を詰りしに、允中之に答へ、公等の眼光徒らに爛々たるも所謂明盲にして、未だ物を見るの眼にあらず。今日本に航して其開化を目撃し以て胸臆を一洗せば、設ひ眼は閉たるも亦た憂とするに足らざるべし、と云ひしより、遂に一場の争論を引起したるよし。

この引用文から、われわれは二つの興味ある事実を知ることができる。その一つは、魚允中にとって、「事物を見る眼のない盲目」であると思えた沈相学（一八四五～？）のような同僚朝士は、日本の視察を通じて思考を革新させる教育の対象であったということであり、もう一つは、魚允中のように、自らは世界を見る新たな尺度を備えていることを白負していたということである。開化思想という新たな認識の枠組みを持って日本を見聞した魚允中・洪英植と、儒学的世界観をそのまま固守しながら日本の新しい文物に接した沈相学のような朝士たちは、日本を見る尺度が当然異なるしかなかった。その結果彼らには、明治時代の日本人が夢見た日本型国民国家のあれこれを理解し診断する幅や深さなど、日本を視察しながら得た朝鮮改革に関する構想について非常に大きな差異があった⁽¹³⁾。

すでに儒教的価値観の鎖から脱していた魚允中と洪英植にとっての日本視察は、彼らが夢見ていた新しい国家像を完成させる機会であった⁽¹⁴⁾。特に彼らは、当時の国権論者として名高い福澤諭吉（一八三五～一九〇一）に会い、また明治政府が実現した文明開化政策を直接に見ることによって、執権的政府主導下の改革論、言い換えれば啓蒙を通じて上からの改革を構想するようになった⁽¹⁵⁾。つぎのように高宗に復命したことからもわかるように、彼らは、日本が成し遂げた発展像を肯定的に受け入れながら、日本の富国強兵政策を当時の実情に見合う功利的な方策としてみなしたのである⁽¹⁶⁾。

高宗…日本の制度が壮大で政治が富強であると言われているが、視察してみて本当にそうであったのか？

洪英植…日本の制度がたとえ壮大であっても、それはすべてが集まってかつ積み重ねられてなされたものであります。財力については、さまざまな事業を推進するものが多く、常に不足することを心配しております。その軍政は強くないとは言えませんが、これは皆、昼夜を問わず勤勉に心と力を一つに合わせてなしたものと

であります。日本が努力してなしたことを見ると、真に難しいことはありません。

高 宗…常に富強だけを計った戦国時代と同一であるだろうか？

魚允中…真にそうであります。春秋戦国はまさに小戦国であり、今日は大戦国であるので、すべての国がただ知力で競争するだけであります。……現在の情勢を振り返って見ると、富強でなければ国家を守ることができないので、上下が合心して努力するのは、まさにこの一事だけであります。

彼らは、日本で見聞きたり、あるいは学ぶ過程で、日本のような近代国民国家の建設を夢見たという点から、「国民国家建設論者」と呼ぶことができるであろう。⁽¹⁷⁾

しかし、大多数の朝士たちにとって、僅か四ヶ月に過ぎない日本での経験は、数十年間に染み付いた儒教的価値と世界観から脱皮するには余りにも短かった。⁽¹⁸⁾ 朝士たちは、日本を廻りながら孔子を奉る文廟に線香を上げること(祭享)を廃止したのを慨嘆したり、儒学が衰えていくのを大変惜しんでいた。⁽¹⁹⁾ そういう状況の下で彼らは、儒教的価値基準で日本の近代文物を評価せざるを得ず、近代日本の多くの姿について批判的であった。

日本が外面的には富強になったことは認めたが、それによって財政が悪化し生活習慣が西欧化されたことを非難した。朴定陽(一八四一―一九〇五)は、のちに朝鮮にもどり、高宗に自らの所感を詳細に報告した。⁽²⁰⁾

高 宗…日本の強弱はいかがであったか。

朴定陽…日本は外観を見ると、かなり富強のように見えます。領土が広くないのではなく、軍隊が強くないのではなく、建物と機械が眼に華々しくないのではない。しかし、その中身を仔細に視察すると、そうでも

ないところがあります。一度、西洋と通交した以後は、単に巧妙なものだけを追い求め、財政が枯渇するのは考えないので、機械を設置する度毎に、ほかの国に多くの負債を負うことになります。その機械で生じる利益とほかの国からお借りした利子とを清算してみると、時折、足りないとい心配しております。そうこうしている内に、西洋人から干渉を受けて、あえて活気がなく、一様にその制度を追い、上では政法と風俗から、下では衣服と食べ物に至るまで、習慣が変わらないものがありません。

高宗…倭人がほかの国の法をすべて好み、たぶん折衷しなかったもので、衣服までそのようになったであろう。これは、その国を失うことであろう。

このような見方は、単に朴定陽だけではない。趙準永（一八三三―一八九六）は、日本が無条件に西欧を真似てその国の領土と百姓を除き、伝統的なものは眼を洗って探してみてもないほどであると言っているが、姜文馨（一八三一―？）は、全く恥じることなく西洋を模倣しようとするので、失うものがより多くなる計算になると言った。⁽²¹⁾

しかしながら趙準永のように、「その軍制や武器、船、機械、農法など、国家を強くし、百姓の生活を豊かにするのは習うに値する」と考えていたようである。⁽²²⁾

このように彼らは、日本が外面的に富強になったことは認めたが、それによって財政が悪くなり生活習慣が西欧化されたことを非難した。彼らは、伝統的な価値を保存する範囲のなかで、国家の生存と百姓たちの生活に手助けになり得る軍事および産業技術と営農方式のようなものは選択的に習わなければならない、という考えを持っていたと言えよう。

それだけでなく彼らは、儒教の価値基準に外れないと判断される日本の制度についても開放的姿勢をとったという

点から、当時の衛正斥邪論者よりも外国の文物を受容することに柔軟であったようである。したがって彼らが日本で経験した近代文物と制度に対する知識は、長期的には彼らの儒教的価値観を変化させる上で大きな影響を及ぼしたように思われる。

魚允中が「眼の開かれた盲人」とためらわずに言った沈相学を始めとする大部分の朝士は、儒教的思考から脱することができなかったが、選択的に近代文物の受容を提起した点で、「東道西器論者」であると見ることができる。

2 朝鮮改革の双頭馬車

(1) 甲申政変の主役たちが夢見た国家構想の原型としての国民国家建設論

魚允中と洪英植のような国民国家建設論者たちが、日本で経験した日本型国民国家の諸装置は、彼らの国家構想に重要なモデルになった。彼らにとって日本型国民国家は、今後の朝鮮で実現可能な国家モデルとして定着するようになる。この点は、魚允中が構想した国家の設計図を見ると明確になる。⁽²³⁾

第一に、魚允中は、日本の国家統合の装置を朝鮮に導入しようとした。彼らは日本と同様に、君主は国家統合の求心的役割をする象徴的な存在として君臨し、実質的な政治権力は、近代的役割を果す政治勢力が掌握する執権的政府形態を構想したように見られる。富国強兵策を実施して国権が確立し、人民が近代国民として生れ変わり、君民同治を担う主体として成長するまでは立憲政体を留保しなければならない、というのが彼の考えであった。また、このよ

うな上からの富国強兵策が成功するためには、何よりも官僚制の効率的な整備が重要な課題であった。すなわち、官僚らが国政運営の主体になって、国家資源と国民の力量を効率的で合理的に配分・組織する方針を提

示し、科挙制度の廃止と能力給制度の導入、さらに官吏の商工業従事を許容するとした。そして、対外自主権の確保と産業振興のために必須的であるとみなした近代司法体系の受容と、特に西欧に不平等条約締結の口実を与える残酷な封建的行刑制度の改革を主張した。その他近代的な軍事体制を確立することについても積極的であった。

第二に、経済統合のための鳥瞰図である。その第一段階として、物的・人的交流と情報・知識交換の通路である交通・通信網の近代化と、これを土台として日本と同様に、政府主導の下で近代産業を振興し、民間部門の商業を育成することを計画した。そして財政の調達方法として、財政管轄権の中央集権化、税制の近代化をはじめ財閥の育成を通じた資本の集中化、関税自主権回復による財源調達、さらに外資導入を模索した。すなわち彼は、韓国史上、最初に組織的な借款導入と政府主導の経済開発計画を立案し推進した人物であったと言える。

第三に、国民・文化の統合である。彼は、朝鮮の発展が遅れた原因を儒学の崇尚に求めながら、日本のような上からの改革を遂行する精神的支柱として、儒学に代わり得る西欧の近代思想とキリスト教の受容を考慮した。そして近代国民の形成のために、身分制の打破と教育の振興を図る革新的な社会改革論を立案し、新しい知識と情報を積極的に受け入れて、西欧諸国に留学生を派遣して先進文物を吸収すべきであると考えた。

このような革新的国民国家建設論は、急進開化派金玉均・洪英植・朴泳孝などの理想と軌を一にするものであるが、その後彼らが掲げた甲申政変政綱の原型を成している。魚允中が福澤諭吉に送った一八八一年二月二〇日付書翰で、彼は金玉均と朴泳孝、徐光範を自らの「親しい友人(切友)⁽²⁴⁾」であると紹介しながら、彼らが日本を訪問する予定であるのでよく世話をしてくれるようお願いした。また、金玉均は日本を見聞する最中、魚允中の日本と中国の紀行録である『中東紀』を手から離さなかった、という逸話、そして朴泳孝が自らの回顧談の中で、一八八二年に修信使として日本を訪問したことが甲申政変の重要な契機になったと語った事実などは、魚允中が急進開化派に大

きな影響を与えたことを示唆するものである。

(2) 儒教知識層に大きな反響を引き起した東道西器論

魚允中と洪英植を除く大部分の朝士たちにとって、四ヶ月の短い日本視察の経験は、朝鮮の未来を新たに考えて見る契機になったことは明らかである。しかし、生涯にわたって深くしみついた儒教的価値観をのり越える画期的な経験にはなり得なかった。彼らは、朝鮮の伝統的な文化と制度を温存する範囲内で、国家の富強と人民の厚生に関して役に立つ西洋の制度と技術を受け入れるという、いわゆる東道西器論を土台にした国家計画を構想した。東道西器論者たちの国家構想は、大きくつぎのように整理することができるであろう。⁽²⁵⁾

第一に、日本の国家統合装置のなかで、王政復古、執権の政府形態、三権分立の権力構造、そして行政体系と官僚制度の効率性に深い関心をみせたが、民権の拡大については否定的であった。具体的には日本の司法制度と警察制度、軍隊と軍事力に大きな関心を示した。

第二に、「節約・愛民」の伝統的な経済観を持って日本を見ていた彼らは、明治維新以後の目ざましい成長は高く評価していたが、それによる国家財政と民間経済の破綻については、否定的評価をせざるを得なかった。そして魚允中とは異なり、日本式産業振興政策を選択的に採択し推進する立場を取ったが、利便性と財政収入の増大効果がある交通・通信施設、優秀な近代式の鉱山採掘設備と工法、農民啓蒙事業をはじめとする農業振興政策の受容については積極的であった。

第三に、日本の社会・風俗上の変化は、全体的にかなり批判的にみなした。しかし、少なくとも商工業の振興のためには、職業・身分制度に変化が必要であることを認識しており、利用厚生の観点から新聞の啓蒙機能や西洋の医

学、盲啞院のような社会福祉施設については肯定的であった。結局、選択的に西洋の社会制度や技術を受容するという立場であった。

以上のように彼らは、明治維新以後の文明開化の原動力はまさに西欧近代思想にあったという点を理解できなかったために、西欧近代技術の優越性だけを認めて、その技術文明が花咲く土台の重要性を認識しない結果になった。彼らの国家生存戦略は、避けられない西欧に対する門戸開放と西欧勢力の進出に対応して、西欧の技術と武器体系は受け入れても、伝統的体系や価値は維持・強化しようとするもので、近代国民国家を創り出せない限界を伴う弥縫策であった。

しかしそれにも拘らず、東道西器論者たちが提起した選択的西欧文物受容論は、儒生たちに影響を及ぼし、開化上訴運動の契機になったし、壬午軍乱以後、一八八二年八月五日には、国王によるつぎのような国家政策として示された。⁽²⁶⁾

論議する者は、また、西洋と修交を結べば将来邪教に伝染すると言っているが、これは真に、斯文（儒教文化）のために、かつ世相の教化のために深く考えたものである。しかし、修好は修好として行い、禁教は禁教として行うことができ、条約を結んで通商をすることは、ただ萬国公法に従うだけである。はじめから内地に邪教を伝えることを許さなければわれわれの百姓は、本来孔子・孟子の教えに慣れて、長い間礼儀の風俗にそまっているのに、どうして一朝一夕に正しいものを捨てて邪悪なものに従うことができようか。彼らの宗教は邪悪なので、当然淫らな声や化粧をした女子を遠ざけなければならないが、彼らの技術は、ためになるので、真に利用厚生することができるなら、農業、養蚕、医薬、兵器、船、車の制度は、何を恐れて避ける必要があるか。その教え

は排斥すべきだが、その気は倣うべきで、真に平行して逆らうべきものではない。いわんや、強弱の形勢がすでに大きな差がついたので、もし彼らの氣を倣わないとすれば、彼らの侮辱をどのように防ぎ、また彼らのねらいをどのように防ぐことができようか。

壬午軍乱以後、中国の朝鮮政策に帝国主義的傾向が著しく、また一般人民の間に、西洋文化を拒む雰囲氣が盛んな状況の下で、朝廷としては近代化を推進する際にその方法論上において、洋務運動と軌を一にする東道西器論を朝廷の政策として明らかにせざるを得なかったように思われる。

Ⅲ. 岩倉使節団との比較を通じて見た朝士視察団の限界

朝士視察団は、韓国の近代西欧文物受容史のなかで特記すべき歴史的な事件である。視察団一行には、この経験が国民国家建設あるいは西欧技術と武器体系の受容を図る必要性を自覚する契機となり、彼らの国家構想は、以後朝鮮の政治・社会に少なくない影響を及ぼした。また朝士視察団は、韓・日文化交流史において、交流の位相が変わる転換点となり、かつ日本を近代化の発展モデルとして定めた最初の試みであった。二二名にのぼる高位官僚が日本の津々浦々を訪ね、あれこれを視察した後、その見聞したことを朝鮮の改革に反映しようとしたり、留学生を送り日本の学問と技術を学ぼうとしたことは有史以来はじめてのことであった。

事実韓国史の枠内に限定して考察してみると、朝士視察団は、近代文物に対する理解の深さと幅の点で、一八八一年中国に送られた領選使や、一八八三年米国とヨーロッパを視察した報聘使のような海外派遣の使節が目に見えるほ

どの記録を残していないことと比べれば、その成果は著しい。

しかし視野を広げて、幕末期の西欧諸国に派遣された使節団と明治維新以後の岩倉使節団等の、朝士視察団と類似した性格の日本使節団と比較して見ると、朝士視察団の弱点が明らかにになる。この両者の比較を通じてわれわれは、朝鮮が行っていた西欧文物の受容努力の限界性を見つけ出すことができる。

日本の西欧先進文物を受容しようとする努力は、公式使節団派遣と海外留学生などによって推測することができる。幕末期から明治維新以前まで、合わせて六回にわたって西欧諸国に使節団を派遣したが、一八六〇年八〇名の使節が米国に派遣され、一八六二年欧州各国を巡訪した使節団の規模は三八名であった。そして一八六二年オランダ、一八六五年ロシアに留学生を送り、明治維新を主導した長州藩と薩摩藩も、この時期に英国に留学生を密派している。

各国の政治・学制・軍制などを把握する使命をおびた使節団は、代議政治、軍事制度、政府専売制度、社会保障制度から医療、病院経営法、各種学校、電信、郵便、土木技術、埠頭、保税倉庫に至るまで、近代西欧文明が成し遂げたすべてのものを探究した。特に一八六二年の使節団の場合には、西欧文物に対する探究活動が非常に組織的で、かつ徹底的なものであったが、下級調査員たちが毎日探究活動に関する報告書を提出すると、上級書記官はこれらの報告書に基づき『英国探検』、『フランス探検』、『ロシア探検』などの書物に整理した。⁽²⁷⁾

使節団員のなかでも福澤諭吉の旺盛な活動は、群鶏一鶴のごときであった。同僚らがはじめて見た汽車に大いに感嘆し、車輛の大きさ、速度、レールの幅と高さを測定して日記に記録していた時、彼はすでに鉄道会社の構成と経営方法、銀行業、英国とフランスのエジプト鉄道分割支配のようなことに関心を向けていた。この時の経験に基づき後の福澤諭吉は、西欧近代文明の構造を体系的に記述しながら、新たな国家構想のビジョンを提示する著書を刊行した。『西洋事情』がそれである。その頃、一五万部から二〇万部が売れたものと推定されるベストセラー『西洋事情』は、

日本人に対し、西欧近代の産物である国民国家建設の夢を効果的に伝播した最高の媒体であった。

日本で西欧近代を実現しようとする熱望は、単に福澤諭吉だけに限られたものではない。幕末期に外国の空氣に接した大部分の日本人にみられた共通の熱望であった。一八六四年攘夷論者の主張に押されて、横浜鎖港を談判するために欧州に向った第三次使節団の池田長發は、所期の目的を達成することができないことを悟ってとり急ぎ帰国すると、死を覚悟して幕府に献策した。

欧州各国に常駐公使の派遣、すべての独立国家との和親条約の締結、新しい文明攝取のためのフランスへの留学生派遣、西欧各地の新聞との情報交換、日本国民の商業・学術のための海外への渡港の許可など、欧州を直接に見ながら得た自らのアイディア(idea)を実現させるために命をかけた。また、一八六五年薩摩藩の留学生を率いて欧州に行った五代友厚は、ロンドンをはじめ欧州各地で目にした工業と貿易の隆盛に驚嘆した。そして彼は、欧州の貿易商と商社の設立を約束して、京都——大阪間の鉄道および電信架設、造船と銃砲製造施設の設置等を契約して帰って来た。さらに一八六七年フランスに派遣された栗本鋤雲は、ナポレオン大法典の翻訳をはじめさせていた。その後彼は、西欧文明の入門書といえる『曉窓追録』(一八六九)を発刊した。『曉窓追録』にはナポレオン法典の内容をはじめ、都市計画、鉄道、議会、公債、軍隊、集約農業、教育制度など、栗本が驚嘆と羨望を禁じ得なかった西洋文物が鮮明に描かれている。⁽²⁸⁾

たとえこうした使節と留学生たちが攝取して来た西欧文物に対する知識と情報が、幕末期の政治的混乱期においてはそれなりに正しく活用され得なかったとしても、明治維新以後日本の国民国家建設期において、さまざまな形で活用された。幕府時代の使節団出身者たちは、数年後岩倉使節団の書記官として、自らの過去の経験を活かした。

朝士視察団が日本に派遣される十年前に、明治日本は大規模の使節団を海外に派遣した。右大臣岩倉具視を特命全

権大使にした海外使節団は、特命全権副使四名（——参議木戸孝允・大蔵卿大久保利通・工部大輔伊藤博文・外務小輔山口尚芳——）と政府各部署の中堅実務官吏四一名など、公式使節四六名をはじめ、一八名の随行員と留学生四三名によって構成されていた。

廃藩置県を断行してからわずか四ヶ月、近代国家への第一歩を踏み出した新政府は、政府首脳の半分を使節団の代表に任命し、その下に幕末の使節団参加者を書記官に配属し、政府の各部署から派遣された専門理事官まで参加させた、百余名規模の岩倉使節団を海外に派遣した。⁽²⁹⁾

この岩倉使節団の性格と目標は、彼らを見送った太政大臣三條実美の送別辞のなかによく示されている。⁽³⁰⁾

外国ノ交際ハ国ノ安危ニ関シ、使節ノ能否ハ国ノ榮辱ニ係ル。今ヤ大政維新、海外各国ト並立ヲ図ル時ニ方リ、使命ヲ絶域万里ニ奉ズ。外交・内治、前途ノ大業其成其否、実ニ此挙ニ在リ。豈大任ニアラズヤ。大使天然ノ英資ヲ抱キ、中興ノ元勳タリ。所属諸卿皆国家ノ柱石、而テ所率ノ官員、亦是一時ノ俊秀、各欽旨ヲ奉ジ、同心協力、以テ其職ヲ尽ス。我其必ズ奏功ノ遠カラザルヲ知ル。行ケヤ海ニ火輪ヲ転ジ、陸ニ汽車ヲ轡ラシ、万里馳駆、英名ヲ四方ニ宣揚シ、無_レ恙帰朝ヲ祈ル。

大任を抱き出港した岩倉使節団は、一八七一年一月から翌々年の九月まで一年一〇ヶ月間、米国・英国・フランス・ベルギー・オランダ・ドイツ・ロシア・デンマーク・スウェーデン・イタリア・オーストリア・スイスなど欧米先進国家を公式に訪問し、帰路に中東とアジアの後れた状況も観察した。⁽³¹⁾

三條の送別辞にも示されたように、全権大使岩倉ならびに副使大久保と木戸は、明治維新の主役であり、かつ帰国

後にヘゲモニーを掌握した主流派であった。視察を通じて得た知識と情報に基づき大久保は、「立憲政体に関する意見書」、木戸は「憲法制定の建言書」を提出したことから分かるように、彼らの国家構想、言い換えれば日本型国民国家の創出をすぐに実行に移すことができた。⁽³²⁾

西欧近代の成果が一朝に成し遂げられたものではないことを痛切に感じた彼らは、日本の後進性を克服し近代国家として順調に発展するためには、何よりも法制・産業・軍事・教育など全ての部門が同時に発展しなければならない、という認識を持つようになった。まさにこのような脈絡で彼らは視察から帰り、内政改革を主張しながら征韓論に反対した。

すなわち、大久保の征韓論を反駁する文書には、つぎのような事項が記されている。

即今政府の諸業を起し富強の道を計る、多くは数年の後を待ち成功を期したる者にして、則海陸文部司法工部
開拓等の諸業の如き、皆一朝一夕の能く効を致す所に非す⁽³³⁾

そして、使節団の中堅官吏や留学生も各分野に頭角を現わし成長して、日本型国民国家の形成を実質的に支えた。それだけではなく岩倉使節団が収めた成果は、久米邦武の『米欧回覧実記』にそのまま含まれ、全国民が共有できる知識と情報になった。フルベッキの「ブリーフ・スケッチ」の中に、「その使節の全ての成果を、国民の一般的な利益と啓発のために編集・刊行することができであろう」と書れていたことが岩倉の念頭にあり、また各国を回覧する間に、岩倉使節団は天皇ではなく、まさに国民を代表しているとの考え方を持つようになって、自らの経験したことを国民とともに分かち合ったのである。⁽³⁴⁾

それから一〇、二〇年後に、近代文物を学ぶために出発したわれわれの朝士視察団は、日本の使節団とは異なり、非公式の視察団であった。これは当時の朝鮮と日本の近代文物の受容態度を間接的に示しているものと言える。そして、視察任務を滞びた一二名の朝士とその随行員が、約四ヶ月間日本の制度と文物を熱心に調査し視察したが、彼らの経験は、朝鮮の近代化作業に全面的に活用され難いという限界を初めから持っていた。まず彼らは、高宗の密命を受けて個人的資格で出発し、またそうせざるを得ないほど、衛正斥邪派の勢力が強かった。

日本の幕末期と明治維新後の使節団と比較して見る時、つぎのような限界があったと思われる。

第一に、日本が一八六〇年から始めた近代文物の受容努力を、われわれは二〇年後に、それも日本の眼によって変形されたイメージを間接的に経験した。四ヶ月から一年余りの短い視察期間ないし留学期間は、日本型国民国家や西欧近代の知的成果を十分に消化・理解するにはとても足りない期間であった。特に彼らは、西欧近代の知的成果を理解するに際して、主に日本の知識人たちによって「翻訳された近代 (translated modernity)」——「誤訳」「誤読」された近代——を通して行われた可能性が大きい。したがって彼らは、同時代の日本の知識人たちが経験した知的混沌よりはるかに大きな、西欧と日本との相互作用によって日本的に変形された「三重に翻訳された近代 (triple translated modernity)」の迷路を迷わざるを得なかった。⁽³⁵⁾特に、近代西欧から移入された概念——日本で造語され、翻訳された漢字など——にはじめに接した朝士視察団員たちには、これを理解するに際して、文字の裏面で生じる概念の差異を克服することは容易なことではなかった。⁽³⁶⁾

第二に、福澤諭吉が述べたように、日本の使節団は西欧近代が成し遂げた精神的物質的成果の要諦を把握して、これを日本に適用することによって、西欧諸国と肩を並べるといふ明確な目的意識を共有しており、大部分は進歩的な性向の人物で、かつ明治政府の主流派によって構成されていた。それに比べて朝士視察団の場合、もちろん能力が優

れたいわゆる精鋭官僚出身の朝士もいたが、魚允中と洪英植を除く大部分は、国王の下命に従って受働的に参与した封建君主の家臣の範疇を脱していない人々であった。またその随行員たちは、朝士たちとの私的な関係で選拔され、尹致昊(一八六五—一九四五)や兪吉濬(一八五六—一九一四)のように、日本留学が予定されていた人々を除けば、多くの人は官職の経験がなく、専門性を欠如した人々であった。その外に、訳官出身の通訳と下僕など二〇余名も、朝士たちが近代文物と制度を把握する上で、大きな助けになるほど覚醒されていなかった。

第三に、日本の使節団は自らの経験を活字化し、国民と共有することに力を入れていたが、われわれの朝士たちはそのようなことができなかった。朝士たちは朝鮮に帰り、自らが王の密命をどれほどよく遂行したのかを報告するために、約二ヶ月間書写に長けた衙前(官庁の下級官吏)らを動員して「聞見事件」と「視察記」形式の報告書を作成した。このようにして絹で装幀した手書本を高宗に献上した。したがって朝士たちの報告書は、国王や一部の為政者たちが政策を決定する時に、参考資料として利用される程度であったために、彼らが収めた成果が一般の人々まで影響を及ぼしたとみることはできない。⁽³⁷⁾

結びにかえて

朝士たちが日本で経験した「文明開化」の衝撃は、為政者と知識人層に伝わり、彼らの価値観と世界観を変化させ、国の政策を決める上に影響を及ぼした。この点で朝士視察団の日本派遣は、個人を越えて国家・社会的次元で反響を引き出したと言ってよいであろう。また、韓国と日本との文化交流史の上で逆転現象が生じた転換点であったとみることができる。朝士たちが日本で経験したことを土台に構想した国民国家建設論と東道西器論は、一八八〇—

一八九〇年代の朝鮮が推進した開化・自強運動の精神的原動力であり、これを推進した双頭馬車であった。開化期において朝鮮が選択し得る近代化のモデルが中国式と日本式、あるいは東道西器論と国民国家建設論であったという時、ふり返ってみると後者がはるかに望ましいモデルであった。前者は西欧近代思想の重要性を認識しなかった点で時代錯誤的であった。当時、日本の近代をモデルとする国民国家の建設を企てた朝士らが数的に劣勢であったことは、以後の朝鮮近代化過程が平坦ではなかったことを示唆する。しかし巨視的に見ると、衛正斥邪派知識人たちと異なり、西欧文物の受容に悠然たる姿勢を示した東道西器論者たちも、日本を視察しながら得た近代文物と制度に関する知識に力を得て、その見方が大きく変化することによって、朝鮮に国民国家を建設する必要性を自覚する可能性が大きくなった。

実は福澤諭吉も、一八六二年に欧州を巡回した時には、西欧近代の産物である民主主義の基本制度と慣行を理解することができなかった⁽³⁸⁾。しかし福澤諭吉は、西欧諸国を視察しながら学んだ新たな見聞に基づき近代的啓蒙思想家に変わったのである。けだし、西欧の近代文物に接しながら習得した知識と情報をただちに理解することはできなかったが、長期的に福澤諭吉の世界観の変化に大きな影響を及ぼしたことは確実であったように思われる。それと同様に東道西器論を提起した朝士たちのなかの数人は、一〇余年の歳月が過ぎた後、本格的に日本指向の近代国家建設を企てた甲午更張（一八九四―一八九五）にそれぞれ参加したことがあった。当時朴定陽は、学部大臣と総理大臣、李鏞永は内部大臣、嚴世永は農商工部大臣として活躍した。甲午更張の改革の推進機構であった軍国機務處は、これら東道西器論者たちが肯定的に受け入れた日本の執権的政府に類似した集団指導体制の性格を帯びており、当時地方制度改革の一環として推進した選挙による郷会の構成は、彼らが評価した日本の府・県会に類似した制限的地方自治制度であった。こうしたことを考慮してみると、彼らも長期的には国民国家を建設する必要性を悟ったように思われる。

もしそうであるとすれば国民国家を建設しようとした魚允中の理想は、なぜ水の泡になるしかなかったのであろうか。さまざまな理由があると思われるが、その一つは、皮肉にも魚允中と同一の理想を夢みた急進派の人々が、日本の力を借りて無謀な行動で起した流血クーデターである甲申政変(一八八四)であり、もう一つの理由は、甲申政変の失敗後より強くなった中国の干渉と保守勢力の反動のなから見つけ出すことができる。

甲申政変以後政変の同調者と思われ、追放されたか肅清された魚允中、兪吉濬、尹致昊などの朝士と随行員らは、甲午更張を契機に政治の前面に再登場することによって、自らの国家構想を実践に移すことができた。彼らは国家統合を実現するために、内閣中心の立憲君主制と制限的代議政治の導入、警察制度の創設と法制の近代化、そして常備軍の育成を企て、経済統合の方法として王室の財政の整理を通じた政府収入の増大、徴税法の改良、新たな税源の発掘、政府主導下の民間商工業の振興などを企てる一方、これに必要な財政需要を日本からの借款で調達する計画を立てた。さらに国民統合のために、伝統的な身分制度の撤廃と近代の学校制度の普及を通じて国民を創出し育成しようとし、中国に対する朝貢を廃止するなど、対外的に国家の自主と独立を確保しようとした。

彼らもやはり甲申政変を主導した急進開化派と同様に、日本の支援を受けて国民国家を建設しようとした点で、また彼らが実現しようとした国民国家建設方法の裏面には、日本帝国主義の侵略を幫助・擁護した面が多いという点で、日本侵略軍と野合した親日開化派という非難は避けられない。しかし彼らに伴っていた外勢依存的改革の没主体性は、甲申政変を含む一九世紀以来から今日に至るまで、韓国のすべての執権的政府が胎生的に持っている共通の弱点でもある。このように魚允中が日本をモデルに立案した国民国家建設論は、旧韓末、甲申政変から愛国啓蒙運動に至る時期に、国民国家建設を企てた運動主体が具現しようとした韓国型国民国家の原型であった。なぜならば当時彼らには、日本モデルが、たとえ人民主権論に基づき平等で自由な市民共同体としての民族を想定していたフランス大

革命の歴史的成果を歪曲し変形された国民国家であったとしても、すぐに実現可能でかつ成功の確率が高いものと思われるからである。

開化期において、韓国人が自発的に構想した国民国家の統治形態は、人権が捨象されていた点で、一九四八年以後の南・北韓で発展した権威主義的政府、特に一九六〇年代の韓国の権威主義型軍部独裁政府に類似している。特に、魚允中が立案した執権的政府が主導する上からの近代国家建設戦略と外資導入を通じた経済開発戦略は、五・一六軍事クーデター勢力によって実践された国家建設ないし経済開発戦略の原型であった、という点は興味深いことである。歴史的時空を越えて彼らの国家発展戦略は、西欧近代の普遍を導入しようとせず、非民主的特徴を持つ日本型国民国家をその発展モデルにしている点で共通の限界を持っていた。

最後に、明治時代の日本型国民国家を創出した勢力は、想像された（——他者化された——）西欧を反面教師とし、古代の日本的伝統の復古（——創出——）を図ることによって西欧近代の普遍とは異なる日本近代を創り出した。その一例として日本は、西欧キリスト教に代替し得る文化統合の器材として、日本的伝統のなかで命脈だけを維持していた神道と天皇制を再創出したのである。

このように明治政府が国民統合の求心点として、自国固有の神道を保護・育成することによって、キリスト教の浸透を防ごうとしたのに比べて、魚允中をはじめとする金玉均など急進開化派の人々は、キリスト教を儒教に代替し得る国民教化と富国強兵の効果的手段とみなし、その受容に好意的であった。キリスト教に対するこうした差異点は、その後朝鮮と日本におけるキリスト教伝播の様相に、そのまま現れていることを指摘しておきたい。

（1）田中彰『岩倉使節團』講談社現代新書四八七、一九七七年、四八頁

同『岩倉使節團『米歐回覽實記』』同時代ライブラリー一七四、岩波書店、一九九四年、四六頁
 同『岩倉使節團と『米歐回覽實記』』田中彰・高田誠二編著『『米歐回覽實記』の學際的研究』、北海道大學圖書刊行會、一九九三年、六〇七頁

(2) 新村出編『廣辭苑(第四版)』、岩波書店、一九九一年

(3) Han Kyong-Koo『現代日本のなかのオリエンタリズムとオクシデンタリズム』、韓国文化人類学会、二〇〇一年、第三三回全国大会発表文。日本国民国家の起源がいくら西洋にあると言っても、これは日本的伝統と衝突しながら、形式と内容面において変形が生じざるを得ない。このように西欧近代を「誤解」「誤読」ないしは「捏造」して利用することを分析する概念としてオクシデンタリズム(Occidentalism)が極めて有用なモデルであるかのように思われる。これについては、Shaomei Chen『オクシデンタリズム』図書出版、二〇〇一年参照

(4) 国民国家は、普遍宗教の支配下にあった中世の衰頹以後、宗教に代替して、個人の永遠性を国家と民族のなかに求めようとしたところから発生した想像の産物に過ぎないものかも知れない。

アンダーソンは、国民ないし民族を『想像の共同体——民族主義の起源と流行』で「民族(nation)はイメージとして、心のなかで描写される想像の政治共同体(an imagined political community)である」と定義した。西欧中心ではなく、南米と東南アジア新生国における国民形成の側面から、民族主義を分析して、「民族」の虚構性を明確に指摘したアンダーソンの指摘以後、国民国家に対する論議の方向は大きく転換された。

Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and spread of Nationalism*, London・New York: Verso, 1991, Revised Edition.

韓国では、つぎの書名で訳されている。アンダーソン(Yun Hyong Sook 訳)『民族主義の起源と伝播』Nanam、一九九一年。
 B・アンダーソン(崔錫榮 訳)『民族意識の歴史人類学』、西京文化社、一九九一年

(5) 西川長夫『日本型國民國家の形成——比較史的観点から』西川長夫・松宮秀治編『幕末・明治期の國民國家形成と文化變容』、新曜社、一九九五年、三〇四二頁

(6) 岡義武(Chang in-sung 訳)『近代日本政治史Ⅰ』、昭和、一九九六年、一八頁、二二頁。金用徳「開港と自強の模索」Park Yongjae 外『一九世紀における日本の近代化』、ソウル大学校出版部、一二二〜一二八頁

(7) 西川長夫、前掲論文、三〇〜三八頁。安丸良夫「一八五〇〜七〇年代の日本——維新變革」『岩波講座』日本通史近代Ⅰ一六、

岩波書店、一九九四年、四〇〇四三頁。牧原憲夫「文明開化論」上掲書、二五九〜二六四頁

- (8) 朝士たちが目撃した日本の王政復古は、東洋の専制王権の樹立ではなく、また西欧の立憲君主制と完全に一致したものを再現したものでもない。それは、君主は君臨するが統治はしないという点で立憲君主制と類似するが、政府の実権を掌握した藩閥勢力の統治行為を規律し牽制する憲法と国会が置かれていないという点で、日本特有の方式に変形された政治体制であると言える。当時これら執権勢力は、西欧列強の進出に対抗して、日本の国家的独立を守るためには、何よりも富国強兵を達成しなければならなるとみなした。

そして、彼らは国家統合の象徴として天皇を立てて、下から生じる市民的自由や平等に対する実現の要求を抑圧しながら、西欧近代の産物を、上から日本式に受け入れて変化させて行った。このような藩閥勢力が執権した非民主的政府をここでは執権的政府と称する。

- (9) 差波重紀子「汽船と道路」高村直助編『産業革命——近代日本の軌跡八』、吉川弘文館、一九九四年、六八〜八七頁。小風秀雄「鐵道の時代」高村直助編同上書、八八〜九〇頁。梶西光速「交通通信業の發達」澁澤敬三編『明治文化史・社會經濟』一一、原書房、一九七九年、四〇七〜四二二頁。安丸良夫、前掲論文、四二〜四三頁。西川長夫、前掲論文、三一〜三三頁

- (10) 山口和雄『日本經濟史(經濟學全集一二)』、筑摩書房、一九六八年、九三〜一〇八頁。大江志乃夫『日本の産業革命』、岩波書店、一九六八年、一〜八頁、四九〜七三頁。神山恒雄「官業から民業へ」高村直助編前掲書、四七〜四九頁。石塚裕道「殖産興業政策の展開」梶西光速編『日本經濟史大系——近代——上』五、東京大学學出版會、一九六五年、四四〜四七頁

- (11) 大久保利謙「文明開化」(岩波講座) 日本歴史近代二 一五、岩波書店、一九六七年、二五五〜二五八頁。ひろたまさき「啓蒙思想と文明開化」(岩波講座) 日本歴史近代二 一四、岩波書店、一九七五年、三三八〜三三九頁。安丸良夫、前掲論文、四〇〜四三頁。牧原憲夫、前掲論文、二五五頁

- (12) 『朝野新聞』一八八一年五月二〇日付

- (13) 拙稿「一八八一年 朝鮮朝士日本視察團に関する一研究」『韓國史研究』五二、一九八六年、一三五〜一四六頁

同「一八八一年 朝士視察團の明治日本政治制度理解」『韓國史研究』八六、一九九四年、一三六〜一三七頁

同「一八八一年 朝士視察團の明治日本司法制度理解」『震檀學報』八四、一九九七年、一四六〜一四八頁

同「一八八一年 朝士視察團の明治日本軍制觀研究」『亜太研究』五、一九九八(a)、四八三〜四八七頁

同「一八八一年 朝士視察團の明治日本社會・風俗觀」『韓國史研究』一〇一、一九九八(b)、一四八頁

同「日本視察団の派遣」国史編纂委員会『韓国史』三八、一九九九年、一二二～一二五頁

- (14) 魚允中『隨聞録』、拙編『朝士視察団関係資料集』一三、國學資料院二〇〇〇(a)、一五、二五、五六頁。「我が国は、儒教を崇尚し、その上、懦弱で柔弱なことを善良であると言っている。故に、勇敢に気性をふるわせる人が一人もない。したがって、風俗を变革しようとすれば彼らにして、古い習慣を痛烈に破壊しなければならない。……科擧を廃止すれば公明進取を図る人々が先を競って外国に行き、才能と技芸を習得して帰って来るだろう。もし科擧を廃止しなければ、人材が生まれることがなく、皆が旧学間に安住して學術の精進を求めないであろう。……昔の人々は誰でも、貧窮を安らかに思う安貧を善良であるとみなしたので、それは真に正しくないのである。人々は貧しいことを安らかに思うようにすることによって、生きる方法を努力しなかったたので、その口(食)と体(生活)をどのように支えることができるであろうか。」

- (15) 拙稿「一八八一年 朝士魚允中の日本經濟政策認識」『韓國史研究』九三、一九九三、一二四～一二九頁

- (16) 『承政院日記』一八八一年九月一日條。魚允中『從政年表』、拙編、二〇〇〇(a)、一九頁

- (17) 従来、魚允中の改革思想について論及した研究は、魚允中の著作として間違って知られた李鏞永の『東萊御史書啓(單)』を根拠に、魚允中を東道西器論的穩健開化派の代表的人物として描写したことがある。趙景達「朝鮮における大國主義と小國主義の相克——初期開化派の思想」『朝鮮史研究會論文集』二二、一九八五年、七〇～七三頁。崔震植「魚允中の富強論研究」『國史館論叢』四一、一九九三年、五八～六〇頁

なお、『東萊御史書啓(單)』に対する書誌学的説明は、拙稿「朝士視察団の日本見聞記録総覧」『史叢』四八、一九九八(c)、四七～四八頁参照

- (18) 拙稿(一九八六年)、一三五～一三七頁。同(一九九八(b))、一四八頁

- (19) 「この頃、利益を追求する諸国間の競争については教えを待たずとも、すでに心のなかで慨嘆するところであります。もしこのようないことが絶えずつづくならば、朱公と孔子の教えと礼悪の風俗を将来どこで判断するのでしょうか。実に大したことがなく、心配し嘆くようなことではないでしょう。」李鏞永『日槎集略』、拙編『朝士視察団関係資料集』一四、國學資料院二〇〇〇(c)、四六頁。

「明治以後、新たにそろえた書籍を見ると、十中八九は西洋の本である。勉学する人、四五人がたまに図書館によるだけで、学生はいない。」「近來に祭享を廢止したが、ある人が言うには要職についている人がそのことを行つたと言う。どうして恥ずかしくて、慨嘆しないでいられようか。」閔種默「聞見事件」、拙編、二〇〇〇(b)、一二四～一二五頁

- (20) 朴定陽外「東萊暗行御史復命入侍時筵説」韓國學文獻研究所編、『朴定陽全集』四、亜細亜文化社、一九八四年、三三三頁
- (21) 朴定陽外上掲書、三三八～三四〇頁。拙稿（一九八六年）、一一三頁
- (22) 趙準永『聞見事件』、拙編『朝士視察団關係資料集』一二、国学資料院、二〇〇〇（c）、六一〇～六一一頁
- (23) 拙稿「魚允中（一八四八～一八九六）の開化思想研究——「穩健」開化派ないし親清事大派説に対する批判的検討」、『韓国思想史学』一七、二〇〇一年、四四二～四六七頁
- (24) 「魚允中書翰（明治一四年二月二〇日）」慶應義塾編『福澤諭吉全集』二二、岩波書店、一九六四年、三七四頁、「弊邦の金玉均、朴泳孝、徐光範の三君は皆な中の切友なり。又此に貴邦に航渡せんとし、先づ先生の名を以て之を誦す。當さに即ち往きて拜すべし矣。乞ふ、事に隨つて周旋し艱窘の患有らしむる無かれ。」（判読文）
- (25) 拙著『近代韓日關係史研究』、国学資料院、二〇〇〇年、九七～一二六、一四九～一六六、一八六～二〇七、二一九～二三二頁
- (26) 『高宗實錄』九、高宗一九年八月五日條。權五榮『東道西器論の構造とその展開』『韓國史市民講座』七、一九九〇年、八四～九六頁
- (27) 田中彰『開國と倒幕——日本の歴史一五』、集英社、一九九二年、二三三～二二五頁。芳賀徹、孫順玉訳『明治維新と日本人』、一九八九年、一二五～一三六頁
- (28) 芳賀徹、上掲書、三八～一四〇頁
- (29) 田中彰、前掲書、一九七七年、八～九頁。同、前掲書、一九九四年、二～三頁
- (30) 田中彰、上掲書、一九九四年、四四頁
- (31) 田中彰、上掲書、一九九四年、四六～一九四頁
- (32) 田中彰、上掲書、一九九四年、二一〇～二二二頁
- (33) 『大久保利通文書五』（日本史籍協會叢書三三）、東京大学出版会、一九六八年、五六～五七頁
- (34) 田中彰、前掲書、一九九四年、五一～五二頁。松本健一『日本の近代——開國・維新』一、中央公論社、一九九八年、三四七～三五五頁。福井純子『米歐回覽實記』の成立』西川長夫・松宮秀治編『米歐回覽實記』を讀む、法律文化社、一九九五年、四二九～四三〇頁
- (35) 今は、freedom and people's rights movement と訳されている自由民権運動も明治時代の日本人たちが、個々人の個別的な(individual) 権利を集合概念として、民権(people's right)と誤って訳した所から生じたものとか、Herbert Spencer の Social

Statics（一八五一）を訳する時に、書名を『社会静学』でなく、『社会平権論』と誤訳することによって、この本が自由民権運動の聖典として位置づけられた、というエピソードがその代表的な事例である。

丸山真男、加藤周一（林性模訳、二〇〇〇年）『翻訳と日本の近代』梨山、五四、八八、八九、一〇七頁。「翻訳された近代」という概念については、Lydia Liu, *Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity-China*, Stanford University Press, 一九九五年。林性模訳「翻訳した人の言葉」、上掲書、二一九～二二六頁参照。

(36) 秋月望「末松二郎の筆談に現れた『近代』——一八八一年の「紳士遊覧団」との交流を中心として」『近代交流史と相互認識』I、高麗大学アジア問題研究所、二〇〇一年、二五～三四頁

(37) 朝士たちの日本見聞報告書の大部分は、高宗の個人蔵書である集玉済図書として保管されていた。李泰鎮『高宗時代史の再照明』太学社、二〇〇〇年、三〇〇～三〇三頁

(38) 福澤諭吉『福翁自伝』、慶應義塾編『福澤諭吉全集』七、岩波書店、一九七〇年、一〇七～一〇八頁。

「政治上の選挙法と云ふやうな事が皆無分らない。分らないから選挙法とは如何な法律で議院とは如何な役所かと尋ねると、彼方の人は只笑て居る、何を聞くのか分り切った事だと云ふやうな譯け。……又黨派には保守黨と自由黨と徒黨のやうなものがあつて、雙方負けず劣らず鎬を削つて争ふて居ると云ふ。……太平無事の天下に政治上の喧嘩をして居ると云ふ。サア分らない。……。少しも考の付かう筈がない。彼の人と此の人とは敵だなんと云ふて、同じテーブルで酒を飲んで飯を喰て居る。少しも分らない。」